

超高齢化中山間地域の生活行動と移動に関する研究 ～安芸太田町を事例として～

広島市役所 ○横畠 龍祐
 広島工業大学 今川 朱美
 荒谷建設コンサルタント 田辺 博樹

1. 研究の背景と目的

近年、山間部や島嶼部の地域においては都市部への人口流出や産業の衰退により、過疎化の進行が顕著となっている。こうした地域において、住民の生活や産業を守るためにも、持続可能な地域社会を形成することが不可欠となっている。国は地方創生政策を掲げ、公共交通網の再編や生活サポート拠点の整備などに向けた様々な計画の策定を進めているが、地方自治体においてはまだ具体的な対策には至っていないのが現状である。

本研究では、安芸太田町を事例として、高齢者の行動調査を行い、高齢者の行動特性や移動特性を分析し、地域の生活インフラの持続可能性に与える影響について、施設配置と公共交通網の観点から考察することを目的とする。

2. 対象集落の選定

町内に 48 ある自治振興会の拠点（公民館、自治会館など）と、最寄りの買い物先との距離、標高差の関係をみると、①平坦で拠点から近い、②標高差が大きいが拠点から近い、③拠点まで平坦だが距離が遠い、④標高差が大きく拠点からも遠いという 4 つの傾向を見出した（図 1）。

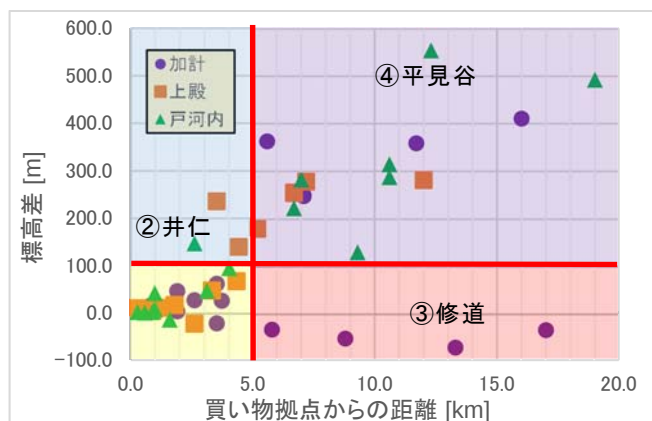


図 1 買い物拠点と標高差の関係

生活利便性が低いと想定される②～④の地域の中からそれぞれ、②は井仁地区、③は修道地区、④は平見谷地区を調査対象地域として選定した。

3. 研究方法

選定した 3 集落において 70 歳前後の高齢者 24 名に協力をいただいて調査を行った。協力者に対して説明会を実施し、調査の趣旨を説明した上で協力を了承いただいた。説明会において事前調査を行い、対象者の健康状態や生活機能の評価、主な活動内容の聞き取りを行った。調査は春季、夏季、秋季の 3 季節に分けて実施した。2 週間の調査期間においては、対象者に腕時計型の GPS 端末を装着して行動していただき、1 日の移動データを記録した。調査中は、対象者自身による活動の記録を行っていただき、後日回収する位置情報データの補完情報とした。

4. 調査結果

4.1 対象者の属性

対象者の平均年齢は男性 71.1 歳、女性 69.6 歳であった。生活機能は男性 10.9 点、女性 11.7 点、抑うつ度は 3.5 点、女性 2.9 点となった。対象者の中に活動環境に影響を与えるほど得点の低い者はおらず、対象者の健康状態に問題はないと判断した。

4.2 行動特性の分析・考察

図 2 及び図 3 に属性別の生活行動時間を示す。対象者の行動を 11 項目に分類し、睡眠を除いた 10 項目の活動時間及び滞在場所別の 1 日の平均値である。

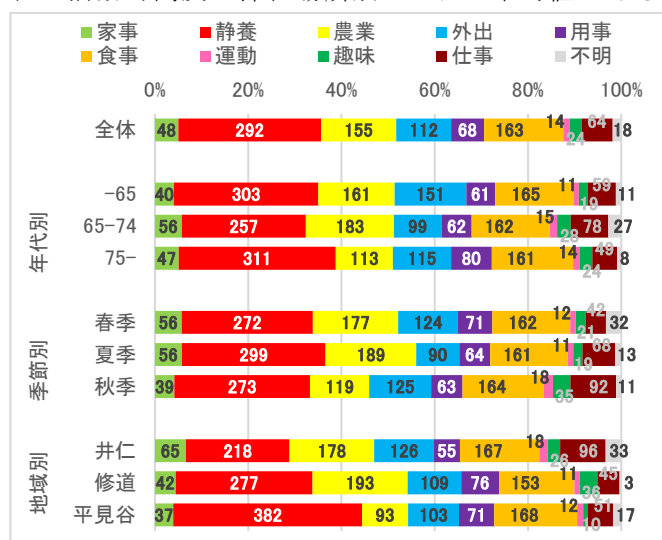


図 2 属性別生活行動時間（分）

キーワード 中山間地域、高齢化、過疎化

連絡先 〒731-5193 広島市佐伯区三宅 2-1-1 E-mail : a.imagawa.vf@it-hiroshima.ac.jp

全体でみると、自宅での静養が最も多く 292 分となった。滞在場所別のグラフより、自宅にいる以外の時間は、平均 360 分となった。年代別にみると、加齢に伴い外出時間が減少し、自宅での滞在時間が長くなっている。ただし、町外への外出は、広島市内の病院への受診や、子や孫宅への訪問が多く 75 歳以降でも大幅に減少していない。

季節別にみると、外出時間に差が出ており、気温が高い夏季は自宅で過ごす時間が長く、農閑期に入る秋季は、町内外への外出が増加している。

地域別にみると、町内外の各移動先への移動距離、農作業や社会参加へ従事する時間が外出時間に影響を与えている。移動距離が長く、農作業や社会参加が活発に行われていない平見谷地区では、自宅での滞在時間が長くなっている。

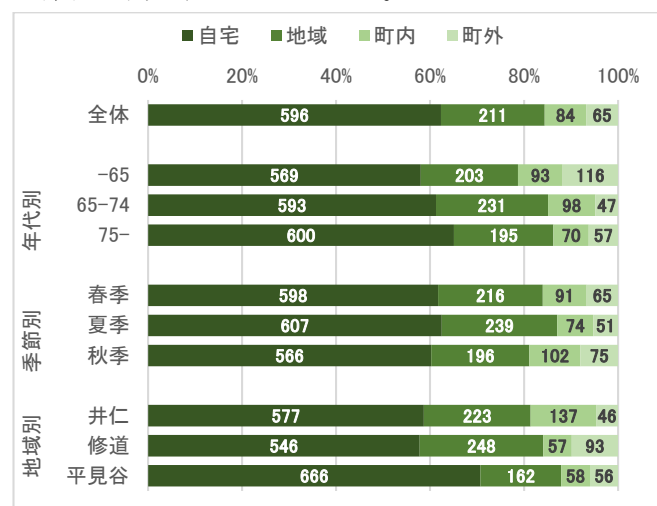


図3 属性別滞在場所 (分)

4.3 移動特性の分析・考察

移動特性としてまず、複数の施設に立ち寄らず 1 つの目的地のみ訪問するパターンが多いことが挙げられる。また、生活圏は地域によって大きく異なっており、最も近い公共施設や商業施設が利用される傾向にあるが、距離が同じで、異なる地点に同等の機能を持つ施設が存在する場合は、町域にとらわれず利用が二分している。町内への外出における滞在時間は約 140 分、町外への外出における滞在時間は約 206 分となった。町外においては移動距離が伸びるほど滞在時間が長くなっているが、町内への外出においては相関がみられなかった。

図 4 は、対象者の移動の軌跡を、GIS ソフト上で道路を細分化した区間に分け、その断面で通過した回数を計測し分類したものである。公共交通網のル

ート外の移動として、北広島町方面への移動がみられる。北広島町に接する平見谷地区、修道地区に多く、買い物のほか、家族や親戚宅への訪問や、温泉やゴルフなど娯楽施設の利用が要因である。

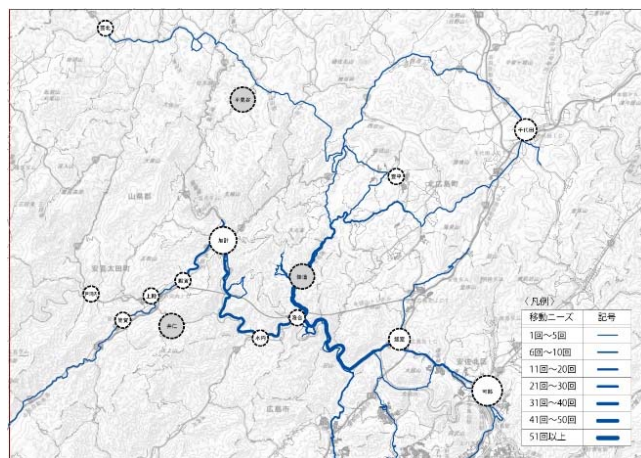


図4 移動軌跡 (修道地区の例)

5. 結論

本研究では、中山間地域における高齢者の生活実態を把握するとともに、高齢化の進行に伴う将来的な施設配置や公共交通網の整備に向けた行動特性や移動ニーズの分析を行った。

得られた結果より、①自宅と単数の目的地を往復することが多く、目的地を絞ったルート設定が可能である。②移動ルートが現在の交通網と重複する箇所が多く、日常生活に必要な移動は確保できている。③買い回りのニーズは少ないが、利便性向上や経済活性化のため、施設の集約化・多目的化を進めることは不可欠である。ということが明らかになった。

また、本研究では集落ごとに考察を行ってきたが、各個人宅を起点とした地域内の移動においては、近距離ではあるが非常に複雑なルートとなっており、公共交通の運行において、効率が悪い場所もある。こうした、各個人の移動に注目し、今後は効率的な公共交通手段、ルート等を検討していく必要がある。

参考文献

- 1) 安芸太田町：安芸太田町地域公共交通網形成計画、2017
- 2) 安芸太田町：安芸太田町まち・ひと・しごと創生総合戦略、2015
- 3) 杉山正晃、生田英輔 他：ニュータウン居住高齢者の生活タイプからみた活動環境の考察、日本建築学会計画系論文集、第 80 巻 第 708 号、341-351、2015
- 4) 柳原崇男：高齢者の外出頻度から見た日常生活活動能力と移動手段に関する考察、土木学会論文集 D3 (土木計画学)、Vol.71、No.5 (土木計画学研究・論文集第 32 巻)、I_459-I_465、2015